木嶋さんちと佐山さんち　1

木嶋さんちと佐山さんち　1

もくじ

ごあいさつ ―――――――――――― 水無月あるて ―――――――――――― 3

ハレルヤ！ ―――――――――――― 夢路可帆 ―――――――――――― 4

唯香とその夫・博孝（ひろたか）の出会いから里香を妊娠するまで。（書き下ろし）

ヴァージン・ロード ―――――――――――― 水無月あるて ―――――――――――― 16

冴子とその夫・柊（ひいらぎ）の出会いから結婚まで。（Artemis掲載）

うわさ（駆（かける）・探（さぐる）ゼロ歳） ―――――――――――― 水無月あるて ―――――――――――― 30

シティーハンターに子供ができた？裏社会に妙なうわさが。（Artemis掲載）

あとがき ―――――――――――― 夢路可帆 ―――――――――――― 32

野上家・木嶋家・佐山家関連図 ―――――――――――― 33

スペシャルサンクス

本文イラスト ―――――――――――― 美穂すろと

本誌に掲載の文章およびイラストの無断転載、コピーを禁じます。

ごあいさつ

この本は、夢路可帆と水無月あるてがそれぞれに運営する「シティーハンター」二次小説サイトに掲載している小説を選抜・再録し、書き下ろしを加えたものです。

この本を手にしてくださった方で木嶋家と佐山家をご存知ない方はいらっしゃらないと思いますが、念のためご説明しますと、こちらのお話では唯香が結婚して佐山姓となり、冴子が結婚して木嶋姓となっています。つまり「木嶋さんちと佐山さんち」は、冴子の家族と唯香の家族のお話です。

もともとは夢路さんがご自分のサイトで唯香の子ども・里香を登場させたお話「平穏の中で」を書かれたのが、最初でした。その後水無月が自サイトで、冴子の子どもたち（駆と探）を主人公にした「木嶋さんちの双子」シリーズを立ち上げ、その中のキャラクターとして唯香と里香の親子を夢路さんからお借りしました。一度だけのつもりがすっかりこの二人が気に入ってしまい、里香は双子の姉貴分として「双子」シリーズの中で育っていきます。

すると今度は、夢路さんがその里香を里帰りさせて、「佐山さんちの人々」というシリーズを始められたのです。そこには当然、木嶋家の人々も登場するというわけで、こうして互いのお話でキャラクターが交流するようになり、合作なども生まれました。さらには作者同士の家が偶然近所だという偶然も重なって、「本、作らない？」という話が出ました。

と言っても、もともと面倒くさがりやの二人なので、とても同人誌を作って販売するような気力はなく、自分たちの記念に数冊作るだけのつもりでした。ですが、もしも「ほしい」といってくださる方がいれば、いつもサイトに来てくださっているお礼代わりに実費でお分けしてもいいのではと思い、再販なしの完全受注生産システムで制作することにしました。

だからこの本は、一冊一冊すべて夢路さんと水無月の手作りです。大量生産ではないので、一般の同人誌よりは割高です。申し訳ありません。（深謝）

でも、水無月のサイトで双子シリーズのイラストを描いてくださっている美穂すろとさんが、この本のために新しいイラストを描きおろしてくださり、おかげでとても素敵な本になりました。この場を借りて心からお礼申し上げます。

「木嶋さんちと佐山さんち」は三冊作成する予定です。この一冊目は唯香夫婦・冴子夫婦が中心の構成ですが、二冊目は少年少女となった子どもたちが、三冊目は社会人となった子どもたちが活躍する予定です。（あくまで予定ですが・笑）

いつもは画面でご覧いただいている木嶋家・佐山家の面々を、こんな形でもお楽しみいただければうれしいです。

二〇〇五年一月

水無月あるて・記

ハレルヤ！

出会い

その日、佐山博孝が編集部に戻ると、編集長が手招きしているのが見えた。

「何でしょうか？」

博孝が編集長に近寄ると、彼は軽く咳払いをして、

「ん、いや、何。その、最近は元気にやってるか？」

「…はあ？」

毎日顔を合わせているのだから、元気かも何も無いものだ。博孝はすぐに彼が面倒事を自分に押し付けるつもりなのだと分かった。

「ええ、ご覧の通り元気ですよ。で、今度は何ですか？」

博孝の言葉に編集長はわざとらしくむせ返った。そして

「いや、まあ…お前、北野ユカ先生は知ってるな？」

「ええ、そりゃあね。」

北野ユカはまだ若干十六歳の高校生ながら、出版する本すべてがベストセラーという、売れっ子推理小説家であった。ましてや彼女が中学生の頃、最年少で大賞をとったミステリー大賞は、博孝の勤める出版社が主宰しているものなのだ。知らぬはずがない。

「でも、その北野先生が何だというんです？」

不思議そうな顔になった博孝に、編集長はもったいぶったように大きく咳払いをすると

「お前、北野先生の担当の山田に、羨ましいとか何とか言ったんだって？」

博孝は一瞬ポカンとなったが、すぐに、

「もしやアレですか？一週間程前、山田さんと飲みに行ったときに、北野先生は原稿が早いからまだいいですよって言った…。」

一週間程前、先輩である編集者とたまたま同時に仕事が仕上がって、一緒に飲もうと誘われた。独身で一人暮らしの気軽さから博孝はそれを承知して一緒に居酒屋へ出掛けて行ったのだが、ひどく酔っ払って愚痴をこぼす先輩をそのように言って慰めたのだけは覚えている。

「ああ、そうだ。…それで、相談なんだがな。」

編集長はここで一旦言葉を止めると、博孝から微妙に視線を外しつつ、

「お前、北野先生の担当やってくれ。」

博孝は目を丸くした。

「こんにちは。あなたが新しい担当さん？」

北野ユカこと野上唯香は待ち合わせの喫茶店に制服姿で現れると、明るくそう言った。博孝は椅子から立ち上がると、

「はい。今度新しく先生の担当になりました、佐山博孝で…。」

「ストップ！堅苦しい挨拶は抜きね。すみませーん、注文お願いしまーす！」

博孝が挨拶を言い終わらない内に、唯香はさっさと目の前に座って、店員にケーキやらパフェやらを注文し始める。